講談社

講談社

SAKADACHI NIKKI

さかだち日記

中島らも

RAMO NAKAJIMA

講談社

【初出一覧】

禁酒・マッチ

「オール讀物」1996年4月号
「激談！ 禁酒鍋」

さかだち日記

「月刊現代」1996年7月号〜1998年6月号

バイアグラ・マッチ

「月刊現代」1998年10月号
「うれしはずかしバイアグラ」

はじめに

一九九五年の五月にアルコール依存症と躁病で何度目かの入院をした。そのとき劇団の若い子が「らもさんが廃人になってしまう」と言って泣いたそうだ。それを聞いて酒はやめよう、そんなにみんなに迷惑をかけているんだったら酒はやめようと思った。それにまだ書きたいものもあるから、生きる方を選ぼう、と。

その再入院の前にかなり重い鬱病になったことがあって、そのときは本当にやばかった。仕事場のワンルームマンションにいたときに、頭の中で「死ね、死んじまえ」という声が聞こえてきたのだ。これに対し「何言うとんねん、ワシは生きるんじゃ」とか言ってワイルドターキーの一リットル入りを飲みながら、三日間その声と闘った。でも結局その声に負けて、「どこかのビルに行って飛び降りよう」と思って立ち上がった瞬間、脂汗が全身からタラーッと吹き出してきた。そのとき「ああ、おれは本当に死ぬんだな」と思った。

でもちょうどそのとき、長年の仕事仲間のわかぎえふが部屋に入ってきて「何してんの」って。

「頼む。救急車でもなんでもかまへん呼んでくれ。自殺願望があるんや」。ほんとうに奇跡的なタイミングだった。

病院に入って禁断症状のキツイのがきて、自分では覚えてないんだけど、間違えて他人の部屋に入ったり、朝の十時なのに真夜中だと思いこんでいたり、転んだり騒いだり、「頭が割れてその中からうどんが出とるのに、目の前では花魁(おいらん)が踊ってる」なんてことも口走っていたらしい。そんなのが一週間ぐらい続いて、そのあとは別に飲みたいという気持ちにならなくなった。

おれが酒を飲み始めたのは十八のときで、同時にシンナー、睡眠薬も始めた。それからずっとほぼ毎日酩酊していた。三十歳で再就職して鬱病になって、抗鬱剤を飲んで働いて、また酒を浴びるように飲む。その間に咳止めシロップも毎日。この咳止めシロップはだんだん耐性がついてくるんで、多いときは一日四本ほど飲んでいた。酒、睡眠薬、咳止めシロップの〝黄金の三角ラリり〟時代。

物書きになってからもまず起き抜けに日本酒を三合くらい飲んでテンションあげてから「よし書き出すぞ」。そして書きながらずっと飲み続けて、原稿があがったらバンザイってまた飲む。ガソリンを詰め込んでいるような感覚で、結局起きているあいだはずっと飲むということを続けていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まあ二十五年くらいほとんど素面（しらふ）という状態を知らなかったわけだから、ずーっと素面というのはなんだか奇妙な気がする。酔っぱらってものを見ていると、世界に対して膜がかかっているんだけれど、素面で見るとリアルな現実と向き合っている感じがする。まあ酔っぱらっていたときの方が、楽といえば楽だったかな。

なぜ人は酩酊を求めるのか？　それは気持ちがよいから。馬鹿みたいに単純な答えだけどそうなんだ。人間は誰だってもともとどこかが欠けている。みんなその欠けた部分を補うために何かに依存して酩酊して生きていく。酒に走る人もいるし、異性に走る人もいる。おれはギャンブルだという人もいるだろうし、それが自分の子どもに向かったり、権力や金に向かったりする人もいるということなんじゃないか。

素面になってから、酒やドラッグに依存して廃人になる人と生き残る人の差について考えたんだけど、結局〝役割〟なんじゃないかと思うようになった。役割のある者は生き残って、ないものは死ぬ。淘汰だ。冷たいような言い方だけど、この世に合わない人は無理に生きていく必要はないと思う。

だから自分も死ぬまで飲まないなんて決意はしていない。自分の役割が済んだら、飲み続けて今度こそ廃人になって死ぬかもしれない。

酒はいいやつだと思う。酒自体には罪はない。でもおれはうまくつきあえないから、まあ今日はやめて明日にしよう、そんな繰り返しでいまのところきているかなと。今日じゃなくて明日、その明日がまた明日ということでいまのところきている。

さかだち日記

目次

はじめに……1
禁酒マッチ vs 野坂昭如……11
さかだち日記……37
粉しか出なくなりました……39
たまには負けることもある……47
徹子さんの前でピエロになる……55
北京で花嫁さんになる……63
「隣が栗原小巻」に関する感慨……71
野坂先生、あしからず……79
ベトナムのヤキソバ恐るべし……87

危機一髪のワンカップ事件……95
バタやんが仰ぎ見た「珍宝」……103
役者馬鹿は眠らない……111
コマーシャルに出てしもた……119
添え木が必要な四十五歳……127
インドで一番楽しい場所……135
スリランカで知る恍惚の味……143
中米で遭遇した巨大な肉塊……151
食魔は香港を食い尽くす……159
おれはロッカーなのに！……167
ババつきコートを翻し……175
学園祭のあと十七時間眠る……183

おお禁断のアムステルダム……191
やせたきゃ小説家になれ……199
ついに芝居をぶっ壊す……207
やばいぞやばいぞ連続飲酒……215
正気で迎えたバースデー……223
バイアグラ・マッチ vs 野坂昭如……231
その後のさかだち日記……258

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さかだち日記

禁酒・マッチ

vs野坂昭如

野坂昭如（のさか・あきゆき）

一九三〇年神奈川県生まれ。早稲田大学文学部中退。六一年『おもちゃのチャチャチャ』で日本レコード大賞作詞賞受賞。六八年『火垂るの墓』で直木賞受賞。八五年には『我が闘争』『こけつまろびつ闇を撃つ』で、第一回講談社エッセイ賞受賞。作家、歌手、タレントと多方面で活躍。中島らもとの縁については『逢う』（講談社）にくわしい。

抗酒剤はお守り

中島　こんばんは。おひさしぶりです。

野坂　はーあ、らもさんってこんな顔してたのか。あなたとはこれまで何度か対談してるんだけれど、お互いグデングデンに近かったからクラゲに目鼻を描いたようなヤツだと思っていた。意外と男っぽい顔してるんじゃないですか（笑）。

中島　野坂さんのほうこそ、いつも酒のにおいプンプンでしたよ（笑）。

野坂　僕は三月十七日で酒をやめてから九ヵ月になるんですけど、あなたはどのくらいになりま

すか。

中島　去年（一九九五年）の五月の二日からやめてますから、十ヵ月ですね。

野坂　その間は一滴もなし？

中島　一滴も飲んでないです。このあいだアル中のオジサンを見ましてね。ＪＲに乗ってたら、前にちょこんと座ってたオジサンが股の辺りからスーッとワンカップ大関出してチューッと飲んで、また知らんぷりしてるんですよ。「ああ、アル中や。ええなあ」と思って見てたんですけど。

野坂　きょうの相手はらもさんだから、二、三日前から趣向を考えてね、向こうが飲まないでいるなら、おれは飲んで対談したほうがいいかなと思った。それで、「なぜ酒なんかやめるんだ、このバカ、裏切者」と罵（ののし）るつもりで、一杯飲んだ（笑）。

中島　はあ。

野坂　しかしね、結局バカ見るのこっちだと思って、やめました。僕は典型的なアルコール依存

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com